

選擇化讚

かるがゆへに選擇攝取せんちやくせつしゆといふ也。二に選擇化讚せんちやくけさんは。下品上生げほんじやうしやうの人。聞經もんきやうと稱佛しよぶつとの二行ぎやうありといへども。彌陀みだの化佛けぶつ。念佛ねんぶつを選擇せんちやくして。汝稱佛名故によしよぶつみやうこ。諸罪消滅しよざいせうめつ。我來迎汝がらいかうによといふ。かるがゆへに選擇化讚せんちやくけさんといふ也。三に選擇附屬せんちやくふぞくは。又定散またでうさんの諸行しよぎやうを明すといへども。たゞひこり念佛ねんぶつの一行いっぎやうを附屬ふぞくす。かるがゆへに選擇附屬せんちやくふぞくといふ也。次に阿彌陀經あみだぎやうの中に。一の選擇せんちやくあり。いはゆる選擇證誠せんちやくじやうんなり。すでに諸經しよきやうの中なかにおいて。多く往生わうじやうの諸行しよぎやうを説とくこいへども。六方ぼうの諸佛しよぶつ。かの諸行しよぎやうにおひて。證誠じやうんせずこの經きやうの中なかに。念佛往生ねんぶつわうじやうをこき給たまふにいたりて。六方恒沙ごうじやの諸

選擇附屬

選擇證誠

選擇我名

三佛の選擇

佛ぶつ。をの舌したをのべて。大千たせんにおほひ誠實じやうじつの語ごをこきて。これを證誠じやうんしたまふ。故ゆへに選擇證誠せんちやくじやうんといふなり。しかのみならず般舟三昧經はんじうまいきやうの中なかに。又一またの選擇せんちやくあり。いはゆる選擇我名せんちやくがみやうなり。彌陀みだみづからこきてのたまはく。我國わがくにに來生らいしやうせんまほつせんものは。つねに我名わがなを念ねんじて。休息くそくあることなかれ。かるがゆへに選擇我名せんちやくがみやうといふなり。本願ほんぐわんと。攝取せつしゆと。我名がみやうと。化讚けさんと。この四よは。これ彌陀みだの選擇せんちやくなり。讚嘆さんたんと。留教るけうと。附屬ふぞくと。この三さんは。これ釋迦しやかの選擇せんちやくなり。證誠じやうんは六方恒沙ごうじやしよぶつ諸佛しよぶつの選擇せんちやくなり。然しかればすなはち。釋迦彌陀しやかみだ。をよび十方ごうじやとうをの恒沙等ごうじやとうの諸佛しよぶつ。

本書の大意

心を同じして。念佛の一行を選択し給ふ。餘行はしからず。かるがゆへに知ぬ。三經ともに。念佛をえらびて。もて宗致とするのみ。はかりおもんみれば。それすみやかに生死をはなれんこほつせば。二種の勝法の中には。しばらく聖道門を闍て。選で淨土門にいれ。淨土門にいらんとほつせば。正雜二行の中に。且くもろくの雜行を抛て。選で正行に歸すべし。正行を修せんとほつせば。正助二業の中には。猶助業を傍にし。えらんで正定をもはらにすべし。正定の業とは。すなはち是佛名を稱するなり。名を稱すれば。かならず生ずることを得。ほこけの本

偏依善導の由 其一

願に依がゆへ也。問ていはく。華嚴。天台。眞言。禪門。三論。法相の諸師。をのをの淨土の法門の章疏をつくる。何ぞかれ等の師によらずして。唯善導一師を用るや。答ていはく。かれ等の諸師。をのをのみな淨土の章疏をつくるこいへども。しかも淨土をもて宗とせずたゞ聖道をもて。その宗とす。かるがゆへに彼等の諸師によらざるなり。善導和尚は。ひこへに淨土をもて宗とし。しかも聖道をもて宗とし給はず。かるがゆへにひとへに善導一師によるなり。問ていはく。淨土の祖師その數又多し。いはく弘法寺の迦才。慈愍三藏等是なり。なんぞかれ等の

△其二

△其三

諸師しよしによらず。たゞ善導ぜんだう一師しをもちゆるや。答こたへていはく。此等これらの諸師しよし。浄土じやうどを宗しゆとすといへども。いまだ三昧まいを發ほつせず。善導ぜんだう和尚かじやうは。これ三昧發得まいほつとくの人ひとなり。道だうにおいてすでに其證そのしやうあり。かるがゆへに且たいこれをもちゆ。問とひていはく。もし三昧發得まいほつとくによらば。懷感禪師ゑかんぜんしも。また是三昧發得まいほつとくの人ひとなり。何ぞこれをもちひざる。答こたへていはく。善導ぜんだうはこれ師しなり。懷感ゑかんはこれ弟子でしなり。かるがゆへに師しによりて。弟子でしによらざるなり。いはんや師資ししの釋しやく。其相違そのさうゐはなはだおほし。かるがゆへにこれをもちひず。問とひていはく。もし師しによりて弟子でしによらずは。道綽禪師だうしやくぜんしは。こ

△其四

れ善導ぜんだう和尚かじやうの師しなり。そもく又浄土またじやうどの祖師そしなり。何ぞこれを用もちひざる。答こたへていはく。道綽禪師だうしやくぜんしは。これ師しなりといへども。いまだ三昧まいを發ほつせず。かるがゆへにみづから往生わうじやうの得否とくひをしらず。善導ぜんだうに問とひていはく。道綽念佛だうしやくねんぶつす往生わうじやうを得んや否いなや。導だう一莖きやうの蓮花れんげを辨べんじて。これを佛前ぶつぜんに置おかしめ。行道ぎやうだう七日にちせんに萎悴しぼますば。すなはち往生わうじやうを得給えたまはんと。これによりて七日にちするに。果然くわぜんとして華萎はなみ黄わうせず。綽しやくその深詣じんけいを嘆たんず。ちなみに入定にふでうして。當まさに生しやうずることを得うべきや否いなやを。觀みんことを請こふ。導だうすなはち定でうに入いりて。須臾しゆゆに報ほうじていはく。師しまさに三罪さいを懺さんして。方まさに往生わうじやうすべし。

導師の浩徳
三昧發得

一には師曾て佛の尊像を安して。檐牖の下に置、みづからは深
 房に處。二には出家の人を。驅使し策役す。三には屋宇を營造
 して。蟲命を損傷す。師よろしく十方佛の前におひて。第一の
 罪を懺し。四方僧の前におひて。第二の罪を懺し。一切衆生の
 前におひて。第三の罪を讚すべし。綽公靜に往咎をおもふに。
 みないふことむなしからず。こゝにおいて洗心悔謝し訖て。導
 に見。すなはちいはく。師の罪滅しぬ。のち當に白光ありて照
 燭すべし。これ師の往生の相なり。已上新修 往生傳出爰に知ぬ。善導和尚は
 行三昧を發して力師位に堪たり。解行凡にあらざること。まさ

化導盛廣

造疏感靈

に是曉し。况や又時の人の諺にいはく。佛法東行より已來いま
 だ禪師のごときの。盛徳あらずこ。絶倫の譽得て稱すべからざ
 るもの歎。しかのみならず觀經の。文義を條録するの刻。すこ
 ぶる靈瑞を感じ。屢聖化にあづかれり。すでに聖の冥加を蒙て
 然して經の科文をつくる。世舉て證定の疏と稱し。人これをた
 うとぶこと。佛の經法のごとし。すなはちかの疏の。第四卷の
 奥にいはく。敬て一切有縁の。智識等に白す。余は既にこれ。
 生死の凡夫。智慧淺短なり。しかるに佛教幽微なれば。あへて
 輒異解を生ぜず。遂にすなはち心を標し。願を結して。靈驗を

請求して。方に心を造すべし。南無歸命盡虛空遍法界の一切の
 三寶。釋迦牟尼佛。阿彌陀佛。觀音勢至。かの土の諸菩薩。大
 海衆。をよび一切の莊嚴相等。某いまこの觀經の要義を出して
 古今を指定せんぞ欲す。もし三世の諸佛。釋迦佛。阿彌陀佛等
 の大悲の願意にかなはず。ねがはくば夢中において。上の所願
 のごこきの。一切境界の。諸相を見ることを得せしめ給へと。
 佛像の前におひて。願を結しをばりて。日別に阿彌陀經を。誦
 するごこ三遍。阿彌陀佛を。念ずるごこ三萬遍至心發願す。す
 なはち當夜において見らく西方の空中に。上のごこくの諸相の

境界のごこごこく。みな顯現す。雑色の寶山。百重千重。種々の
 光明。下地をてらして。地金色のごとし。中に諸佛菩薩ましま
 せり。あるひは坐し。或は立し。或は語し。或は默し。或は身
 手を動し。あるひは住して動せざるものあり。既に此相を見て。
 合掌立觀す。量久してすなはち覺。さめをばりて欣喜に勝ず。
 於即義門を條録す。これより已後。毎夜夢中に。つねに一僧
 あり。きたりて立義の科文を指授す。すでにをばりぬれば。さ
 らにまた見えたまはず。後時脫本し竟て。復さらに至心に。七
 日を要期して。日別に阿彌陀經を。誦するごこ十遍。阿彌陀佛

を。念ずること三萬遍。初夜後夜に。かの佛の國土の莊嚴等の相を觀想し。誠心に歸命すること。もはら上の法のごこくす。當夜にすなはち見る。三具の磴輪道の邊にひこり轉ず。たちまち一人の白き駱駝に乗ずるあり。きたりすゝんですゝめらる。師當に努力で。決定往生すべし。退轉をなすことなかれ。この界は穢惡にして。苦多し貪樂を勞せざれこ。答ていはく。大に賢者好心の視誨をかふむる。某畢命を期こして。あへて懈慢の心を生せじと。云 第二の夜に見らく。阿彌陀佛の身。眞金色にして。七寶樹の下。金蓮華の上に。ましまして坐し給ふ。十僧

圍繞して。またをのの一の寶樹の下に坐せり。佛樹の上に。すなはち天衣ありて挂遶り。面を正し西に向て。合掌して。坐して觀る。第三の夜に見らく。兩の幢杆きはめて大に高く顯れ幡還て。五色なり。道路縱横にして。人觀に礙ここなし。すでに此相を得をはりて。即便休止て。七日に。いたらず。上來の所有靈相は。本心物のためにして。己身の爲にせず。すでにこの相をかふむれり。あへて隱藏せず。謹でもて義の後に申呈して。聞を末代にかふむらしむ。ねがはくば含靈。これを聞て信を生じ。有識觀者をして。西に歸せしめんここを。この功德を

御疏讚歎

もて。衆生に廻施す。ことごとく菩提心をおこして。慈心をも
てあひむかひ。佛眼をもて相見て。菩提まで眷屬し。眞の善知
識となり。おなじく淨國に歸して。共に佛道を成ぜん。この義
すでに證を請て定竟ぬ。一句一字。加減すべからず。寫さんと
欲せん者。もはら經法のごとくせよ知るべし。上巳
靜に以ば。善導の觀經の疏は。これ西方の指南。行者の目足
なり。然ればすなはち。西方の行人。かならずすべからく珍敬
すべし。就中毎夜夢中に僧ありて。玄義を指授す。僧は恐はこ
れ彌陀の應現ならん。爾は謂べし。この書はこれ彌陀の傳説な

本迹一致の
德

り。いかにいはんや。大唐あひつたへていはく。善導はこれ
彌陀の化身なり。爾は謂べし。又この文はこれ彌陀の直説な
り。すでに寫さんご欲せんもの。もはら經法のごとくせよこ
いへり。このことば誠なるか。仰で本地を討ねれば。四十八願
の法王也。十劫正覺のとなへ。念佛にたのみあり。俯して垂跡
を訪へば。專修念佛の導師也。三昧正受のことば。往生にうた
がひなし。本迹異といへども。化導これ一也。こゝに貧道。
昔茲典を披閱して。粗素意を識。立どころに。餘行を捨て。こ
こに念佛に歸す。それより已來今日に至るまで。自行化他。たゞ

本書撰述の
因由と制誠

念佛を絆す。しかればすなはち。希に津を問ものには。示すに
 西方の通津をもてし。たまたま行をたづぬるものには。誨に念
 佛の別行をもてす。これを信ずるものは多く。信ぜざるものは
 尠し。當に知べし。浄土の教。時機を叩て。行運にあたりり。
 念佛の行。水月を感じて。昇降を得たり。しかるに今はからざ
 るに仰を蒙る。辭謝するに地なし。よりていま愍に。念佛の要
 文を集め。剩念佛の要義をのぶ。たゞ命旨を顧て。不敏をか
 へりみず。これすなはち無慚無愧の甚しき也。庶幾は一たび高
 覽を経て後。壁底に埋て。窓前に遺すことなかれ。おそらくは

破法の人として。惡道に墮せしめんことを。

選 擇 集 終

昭和四年十二月一日印刷
昭和四年十二月五日發行

選擇本願念佛集奧附

非賣品

傍訓者

富田鳳瑞

發行人

大阪市南區安堂寺橋通三丁目十五番地
田中右衛門

印刷人

大阪市源連區久保吉町一三三九番地
吉田由治郎

財法二施功德無量檀波羅密具足圓滿平等利益

白道禪室藏版

終

